

福澤諭吉は「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云えり」と語った天賦人權説の人である。また「百姓町人は年貢運上を出して固く国法を守れば、その職分を尽くしたりと云うべし。政府は年貢運上を取りて正しくその使い払いを立て、人民を保護すれば、その職分を尽くしたりと云うべし」と説いた社会契約説の人でもある。

いずれも福澤の初期の大ベストセラー『学問のすゝめ』の中に出てくる。それゆえ福澤は当時のヨーロッパで流布されていた社会思想を日本に知らしめた啓蒙思想家だといわれる。

福澤諭吉の意外な一面

しかし、その論調からするといかにも意外と思われることが同書で語られている。

政府というものはとかく暴政にはしるものだが、これに抗するに国民は何をなすべきかと問うて三策があるという。第一策は「節を屈して政府に従う」、第二策は「力を以て政府に敵対する」、第三策は「正理を守りて身を棄つる」で

諭吉の眼に宿る西郷隆盛の真情

ある。このうち福澤は第三策が最上策だと言つ。こう述べる。

「世を患て身を苦しめ、或は命を落とすものを、西洋の語にハマルチルドム」と云う。失う所のものは唯一人の身なれども、その功能は千万人を殺し、千万両を費したる内乱の師よりも遙に優れり」マルチルドムとはマーティダム(martyrdom)、つまり殉教、殉死のことである。福澤が『学問のすゝめ』の第七編にこのことを書いたのは明治7(1874)年である。2月には佐賀の乱が起つて世情騒然たる時期であった。

征韓論が敗れて下野し佐賀にもどつていた江藤新平を不平士族が促し、明治新政府に挑んだ反乱が佐賀の乱である。江藤はすでに薩摩に下野していた西郷隆盛に挙兵を促すものの、西郷はこれに応じず、結局、佐賀士族は新政府軍と戦い無残な敗北を喫した。

正論



拓殖大学顧問
渡辺 利夫

り着き、指宿の鰻温泉に逗留していた西郷と面談。薩摩拳兵すべしとなお迫る江藤に西郷は、「そりや、当てが違けもすぞ」と叫ぶように言ったという。その後は、江藤に静かに自制を求め、辛苦の人生を耐え抜けよ、反乱ではなく一身を賭して正義を説きつけよ、このマルチルドム以外に世を正す道はないのだと説いたのではないか。私の推量である。

思想に共鳴した西郷
もう一つの推量も可能である

に水戸学を徹底的に教え込まれ、尊王攘夷家として成長した増田は、明治維新が成るや政府の高官となった政治家や実業家がにわか文明開化を唱えるようになったのみならず、維新の受益者として華美な生活を送り蓄財に励むその姿に激しい怒りを持つようになった。そして増田は文明開化の推進者である洋学の第一人者を福澤と見立てて、なんとその暗殺企てたのである。

増田は福澤が東京から中津に母と姪の2人を引き取りに帰郷した時を見計らっていたものの、ひょんなことから暗殺計画は失敗、その後は自ら悟るところがあつて慶應義塾の福澤の門下生に加わり、福澤の自宅に寄寓してその薫陶を受けることになった。

西郷にみた「マルチルドム」

しかし、西南戦争勃発の報に接するや増田には反政府の情念が再び湧き起り、豊前中津藩中津隊の隊長として薩摩の西郷軍に加わった。ここで増田は西郷に邂逅、その人物の思想の深さ、器の大きさに圧倒され、この人物と生死を

共にしなければ自分の生きてある証しが立てられないと考え、西郷への敬慕の念を深くして城山での戦いに殉じた。

福澤は、自らの門下生でありながら学問半ばにして西郷と生死をともにした自分のよく見知っていた増田宋太郎という人物の中に西郷という人物を見つめ、改めて西郷をほるかに仰ぎみたのではないか。西郷は西南戦争に積極的に参加したのではない。私学校生徒の拳兵には終始反対であった。西郷は生徒の「霸道」を最後まで押しとどめ「王道」に生きよと諭したものの、これを生徒に徹底することかなわず、ついに霸道に踏み入ってしまった。西郷は臍を噛み、その後はもう死に場所を求めて九州山中をさまよい歩いたというのが真実に違いない。福澤諭吉は西郷隆盛のその姿の中にマルチルドムをまぎれもなくみていたのではないか。

筆者は、この度『大いなるナシヨナリスト 福澤諭吉』を藤原書店から上梓した。諭吉像の転換を求めての試論である。

(わたなべ としお)